

1 研究主題

学びに喜びを感じられる児童の育成 ～表現活動の工夫を通して～

2 主題設定の理由

(1) 国語科の目標

学習指導要領に示されている国語科の目標は、以下の通りである。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次の通り育成することを目指す。

- (1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉のもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

教科の目標では、まず、国語科において育成を目指す資質・能力を国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力とし、国語科が国語で理解し表現する言語能力を育成する教科であることを示している。

学習指導要領の改訂において示す国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力とは、国語で現された内容や事柄を正確に理解する資質・能力、国語を使って内容や事柄を適切に表現する資質・能力であるが、そのために必要となる国語の使い方を正確に理解する資質・能力、国語を適切に使う資質・能力を含んだものである。

正確に理解する資質・能力と、適切に表現する資質・能力とは、連続的かつ同時に機能するものであるが、表現する内容となる自分の考えなどを形成するためには国語で表現された様々な事物、経験、思い、考え等を理解することが必要である。

また、言語能力を育成する中心的な役割を担う国語科においては、言語活動を通して資質・能力を育成する。言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成するとしているのは、この考え方を示したものである。

上記のように、国語科学習指導要領において国語科の目標が設定されている。国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養うために、本校ではどのような授業改革・教育実践が必要であるかを考えていく必要がある。

(2) 千葉県の学力向上施策

千葉県は、令和7年度から、「人生をしなやかに切り拓き、千葉の未来を創る『人』の育成 ～一人一人が可能性を最大限に伸ばし、自分らしく活躍するために～」を基本理念とする第4期教育振興基本計画をスタートさせた。これに伴い、令和2年度から令和6年度まで取り組んできた「ちばっ子『学力向上』総合プラン」を見直し、「明日からの指導に役立つCHIBAの学力向上施策一覧」を作成した。「5つの視点」で分類した各施策を展開するとともに、成果物や授業に役立つ資料、情報などに簡単にアクセスできるよう、「確かな学力」の育成のための施策を一体的にまとめ、ワンストップ化することで、千葉の学力向上施策を展開し、自ら学ぶ子供たちの育成を図ることとしている。



県が掲げる施策のもとに児童一人一人の学力を向上させていくためには、すべての教科・領域においてその充実を図るために必要な「国語力」の育成が重要である。

(3) 白井市学校教育「なしビジョン」

今年度
<p>1 持続可能な社会の創り手</p> <p>2 確かな学力 (1) 「ケアのある協働的な学び」を実現する授業づくり (2) 特別支援学級における子ども主体の授業づくり (3) ICTの有効活用+学校DX</p> <p>3 豊かな心 (4) 生徒指導における「不登校」「いじめ」への対応の充実 (5) お互いを認め合える学級づくり</p> <p>4 健やかな体 (6) 「体力」「活力」を高める体育指導 (7) 自他の命を大切にする健康・安全教育</p>



白井市学校教育「なしビジョン」がコンセプトとして掲げている「持続可能な社会の創り手」とは、学習指導要領総則の改訂の経緯において、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待されるとある。子供たちが予測困難な時代を生きていくためには、小学校において確かな学力を育んでいかなければならない。

(4) 学校教育目標

心豊かで 共に学び合う たくましい子どもの育成
 「いちっこ」の目標
 「い」っしょうけんめい
 「ち」ーむで取り組み
 「こ」ころとからだを強くしよう

- 〈めざす児童像〉
- ・自らを伸ばそうとする子
 - ・よく考えともに学び子
 - ・やさしく思いやりのある子
 - ・健康でたくましい子

- 〈めざす学校像〉
- ・明るく楽しい学校
 - ・安全で落ち着いた学校
 - ・地域とともに歩む学校

- 〈めざす教師像〉
- ・質の高い授業を追求する教師
 - ・子どもの良さをほめる教師
 - ・組織で対応する教師

本校では、『心豊かで 共に学び合う たくましい子どもの育成～「い」っしょうけんめい 「ち」一むで取り組み 「こ」ころと体を強くしよう～』を学校教育目標として掲げている。あえて分かりやすい言葉で合い言葉を設定している理由としては、学校教育目標が教師だけのものではなく、児童の目標としても位置づけるためである。学校の主たる活動は言うまでもなく「授業」であり、学校教育目標を達成するために何よりも必要であることは、授業改善である。昨年度より、本校では国語科の研究に取り組んでいる。研究の背景の1つに、国語科の授業作りに対して課題意識をもつ職員が多かったことがある。職員が必要だと考える国語科の授業改善に引き続き着手することで、学校教育目標実現に向け、全職員で努力を重ねながら研究を進めていきたい。

(5) 児童の実態

令和5年度から7年度までの国語科の全国学力・学習状況調査の結果を見ると、5年度は12ポイントほど下回り、6年度は8ポイントほど上回り、7年度は4ポイント下回った。調査母体が異なるため一概には言えないが、国語科の能力が安定していないのは確かである。評価の観点で見ると、知識及び技能に比べて思考力・判断力・表現力等の方が平均との差が大きい。さらに学習指導要領の内容で見ると、思考力・判断力・表現力等の中でも「書くこと」と「読むこと」に平均と比較して同程度の課題が見られ、指導の充実の必要性がうかがえる。

職員と児童に国語科アンケートを実施した。

【読むこと・書くことの定着に対する否定的意見の割合】

R6. 5月	教師	児童	R7. 3月	教師	児童
読むこと	62.5%	18%	読むこと	62.5%	19%
書くこと	87.5%	28%	書くこと	87.5%	32%

昨年度より、国語科「読むこと」の研究に取り組んでいる。丁寧に文章をつかみ、読み取ったことを表現する活動を行うことで読みを確かなものにし、学びに喜びを感じられる授業を目指し、実践を重ねてきた。

アンケート結果の著しい傾向として、教師と児童の認識に大きな差が見られた。本校の児童は前向きだったり、深く問題意識をもたなかったりする傾向があるため、このような結果になったと考えられるが、普段の授業の様子や学習の成果物を見ても、読んだり、書いたりすることについてはまだまだ伸び代がある。

また、児童のアンケート結果からは、「国語の力が身に付いている」という実感において、一部で低下が見られた。これは、これまでの単調な学習から、児童が自ら考え、表現する学習へと授業改善を進めたことで、課題の難しさを感じる場面が増えたためであると考えられる。教師側も研究1年目であったことから、児童の実態に応じた支援や手立てが十分でなかった面も考えられる。

だからこそ、本年度も研究を継続し、児童が読みの力を実感しながら学びに向かえる授業づくりや、実態に応じた支援の工夫について研究を深めていく必要がある。

3 研究における目指す児童像

- 文章を読んで自らの考えを表現できる子
- 文章を豊かに音読できる子
- 進んで読書ができる子

4 研究仮説と内容

【仮説1】

それぞれの考えを出し合いながら、文章をつかむ場を設定すれば、読みが深まり、学ぶ喜びを味わうことができるだろう。

• 読み取りにおけるペア・グループ・全体の協働活動の設定

文章を読み取る段階で児童同士が対話をする機会を設定することで、表現活動につながる読み取りをさせていく。分からないところを理解したり、より深く読み取ったりなど、表現活動を行うために不可欠である読みの充実を、対話をもって実現していく。児童同士のみでなく、必要に応じて指導者を交えた個・小集団・全体の対話も取り入れ、作品世界に迫っていく。

表現物についても児童同士が交流する場を設定することで、他者の考えに触れる機会を設け、多様な解釈に触れながら読みを深めることができるようにしていく。

【仮説2】

児童が読み取ったことを表現する方法を工夫すれば、学ぶ喜びを味わうことができるだろう。

• 絵や図、音読や朗読劇、詩や短歌など⇒読み取ったことを自分なりに表現する。

読み取った内容を表現する際、表整理や付属ワークシート活用といった従来の方法に依るのではなく、指導者が表現方法の工夫を図ることで、児童の豊かな表現につなげたり、学習を楽しんだりできるようにする。その際、ゴールの姿（表現物）を提示し、児童が学びの成果を具体的にイメージしながら表現していけるようにしていく。